日本文学名著
日汉对照系列丛书

雪国·伊豆舞女

雪国の踊子

■日本第一位诺贝尔文学奖得主的力作。学子远游中邂逅年轻美丽的小舞女，他的平和与善良，她的纯真与美丽，一段奇遇，两处思绪……。

川端康成 著
叶渭渠 译

吉林大学出版社

日本文学名著
日汉对照系列丛书

雪国·伊豆の踊子

雪国·伊豆舞女

■日本第一位诺贝尔文学奖得主的力作，学子远游中邂逅年轻美丽的小舞女，他的平和与善良，她的纯真与美丽，一段奇遇，两处思绪……

川端康成 著
叶渭渠 译

吉林文史出版社

图书在版编目（CIP）数据

雪国·伊豆舞女/（日）川端康成著；叶渭渠译.—长春：吉林大学出版社，2009.3
（日本文学名著日汉对照系列丛书）
ISBN 978-7-5601-4055-1

Ⅰ.雪… Ⅱ.①川…②叶… Ⅲ.①日语-汉语-对照读物②中篇小说-作品集-日本-现代 Ⅳ.H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字（2009）第045421号

日本文学名著日汉对照系列丛书

雪国·伊豆舞女

◎作者 川端康成
◎译 叶渭渠
◎责任编辑 刘冠宏
◎责任校对 刘冠宏
◎封面设计 张沭沉
◎版式设计 孙明晓
◎出版发行 吉林大学出版社
◎社址 长春市明德路421号
◎邮编 130021
◎发行部电话 0431—88499826
◎网址 http://www.jlup.com.cn
◎E-mail jlup@mail.jlu.edu.cn
◎印刷 长春市华艺印刷有限公司

版权所有 翻印必究

150mm×230mm 16开 17.25印张 210千字
2009年04月第1版 2009年04月第1次印刷
ISBN 978—7—5601—4055—1
定价：26.00 元

出版者的话

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，出现误会，甚至由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影；名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》《十三夜》《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鸥外的《舞女》《山椒大夫》《高濑舟》，夏目漱石的《我是猫》《少爷》，芥川龙之介的

《罗生门》《鼻子》《山芋粥》《蜘蛛丝》《地狱图》《河童》，梶井基次郎的《柠檬》《有城楼的市镇》《冬天》《冬天的苍蝇》《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》《太阳》《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2009年4月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序 言

川端康成（かわばた やすなり），生于1899年6月11日，卒于1972年4月16日，日本著名作家。幼年父母双亡，后祖父母和姐姐相继病故，孤独忧郁伴其一生。作者先后参加新感觉派、新兴艺术派和新心理主义文学运动，一生创作小说100多篇。作品长于抒情，追求人生升华的美。1968年，作者以《雪国》《古都》《千只鹤》三部代表作，获得诺贝尔文学奖，被褒奖为“表现了日本人心灵的精髓。”1970年，三岛由纪夫切腹自杀，只有川端康成获准进入现场。川端很受刺激，称“被砍下脑袋的应该是我”。17个月后，川端康成在日本古都镰仓也含煤气管自杀，未留只字。早在1962年他就说过：“自杀而无遗书，是最好不过的了。无言的死，就是无限的活。”

本书选录的《伊豆的舞女》（1926），是川端早期成名之作。川端为孤儿气质所圈，心中忧郁。一次去伊豆旅行，偶与年少舞女邂逅，得到舞女善待，便产生了纯洁的友情；同样，受人歧视和凌辱的舞女遇到友善的中学生，得以平等相待，不禁动情。彼此既有真挚诚实的友情，也流露了淡淡的爱。小说便是这段经历的艺术化结果。

《雪国》（1935—1937），则是作者获奖的三大力作之一，描写了雪国底层女性形体和精神上的纯洁和美，以及作家深沉的虚无感。《雪国》的创作始于1934年，最初采取了连载形式，3年后出版单行本，并获得第三届文艺恳话会奖。其时正值日本帝国主义侵占我国东北地区的时期。《雪国》既未歌颂侵略战争，也未像小林多喜二的《为党生活的人》那样正面批

判和反对侵略战争，但仍然不免艰辛。《雪国》最初以短篇形式分别发表于各种刊物，后因形势险恶，1937年后基本停发，直至战后才修改补充，最后完成。

川端在《雪国》中把现实抽象化，把虚无世界、把对世相的感动贯穿在人情世相中，暗示人生徒劳。艺妓驹子爱上岛村，不能自持，但岛村认为驹子的爱情甚至她的生存本身就是徒劳的，可悲的。岛村倾心叶子，而叶子却可望而不可及。

在艺术手法方面，《雪国》把西方现代派的某些创作手法和日本固有的文学传统结合起来，无论在人物形象的塑造方面，还是情节结构方面，均能另辟蹊径，为日本文学和世界文学的发展做出了贡献。川端继承了日本古典文学重视人物心理刻画的传统，巧妙地运用了自由联想的心理描写法，让岛村在幻想中强化和美化叶子的形象，也细腻地反映了岛村本人的性格和品质。在结构上，川端借鉴西方“意识流”的创作手法，在总体上基本按照事物发展的时间顺序来写，在某些局部又通过岛村的自由联想展开故事和推动情节，使作品避免了平铺直叙的呆板之病。同时，作品还鲜明地体现了“新感觉派”所主张的以纯粹个人官能感觉为出发点，依靠直觉来把握事物的特点。结尾描写叶子在蚕房火灾中为救出孩子而献出生命的情节，依靠直觉写得既悲且美，使叶子这个非现实美的幻影在作者的直觉中得到最后完成。

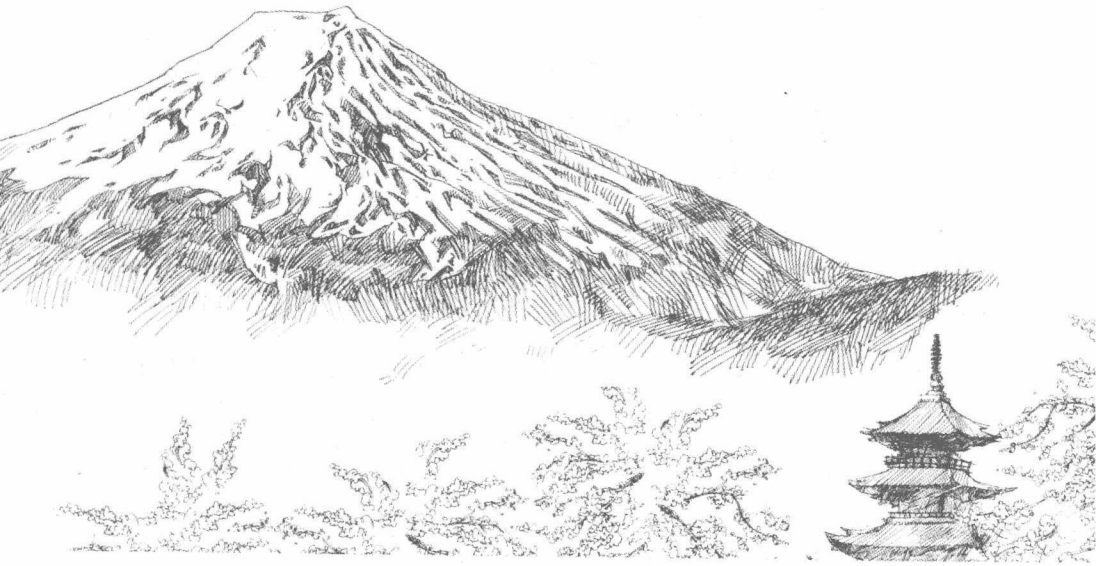
本次我们采用了叶渭渠先生的译本，将这两本文学名作奉献给读者。由于时间紧迫，编者水平有限，错误在所难免，望读者不吝赐教。

编者

2009年4月于长春

目录

雪国……2
伊豆の踊子…… 218



雪　国

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さん、駅長さん。」

明かりをさげてゆっくり雪を踏んできた男は、襟巻(えりまき)で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾(やますそ)に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしゅうございます。」

「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいておりますのですってね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて参るだろうよ。若いのに可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、駅長さんからよく教えてやっていただいて、よろしくお願いいたしますわ。」

「よろしい。元気で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だったよ。よく雪崩(なだ)れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出(たきだ)しがいそがしかったよ。」

「駅長さんずいぶん厚着に見えますわ。弟の手紙には、まだチョッキも着ていないようなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでいるよ。それでごろごろあすこにぶっ倒れてるのさ、風邪(かぜ)を引いてね。」

駅長は官舎の方へ手の明かりを振り向けた。

雪国

穿过县界长长的隧道，便是雪国。夜空下一片白茫茫。火车在信号所前停了下来。

一位姑娘从对面座位上站起身子，把岛村座位前的玻璃窗打开。一股冷空气卷袭进来。姑娘将身子探出窗外，仿佛向远方呼唤似地喊道：

“站长先生，站长先生！”

一个把围巾缠到鼻子上、帽耳聋拉在耳朵边的男子，手拎提灯，踏着雪缓步走了过来。

岛村心想：已经这么冷了吗？他向窗外望去，只见铁路人员当作临时宿舍的木板房，星星点点地散落在山脚下，给人一种冷寂的感觉。那边的白雪，早已被黑暗吞噬了。

“站长先生，是我。您好啊！”“哟，这不是叶子姑娘吗！回家呀？又是大冷天了。”“听说我弟弟到这里来工作，我要谢谢您的照顾。”“在这种地方，早晚会寂寞得难受的。年纪轻轻，怪可怜的！”“他还是个孩子，请站长先生常指点他，拜托您了。”“行啊。他干得很带劲，往后会忙起来的。去年也下了大雪，常常闹雪崩，火车一抛锚，村里人就忙着给旅客送水送饭。”“站长先生好像穿得很多，我弟弟来信说，他还没穿西服背心呢。”“我都穿四件啦！小伙子们遇上大冷天就一个劲儿地喝酒，现在一个个都得了感冒，东歪西倒地躺在那儿啦。”

站长向宿舍那边晃了晃手上的提灯。

“我弟弟也喝酒了吗？”

「弟もお酒をいただきますでしょうか。」

「いや。」

「駅長さんもうお帰りですの？」

「私は怪我(けが)をして、医者に通ってるんだ。」

「まあ。いけませんわ。」

和服に外套(がいとう)の駅長は寒い立話をさっさと切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、

「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」

「駅長さん、弟は今出ておりませんの？」と葉子は雪の上を目捜しして、

「駅長さん、弟をよく見てやって、お願いです。」

悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂(こだま)して来そうだった。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかった。そうして線路の下を歩いている駅長に追いつくと、

「駅長さあん、今度の休みの日に家へお帰りって、弟に言ってやって下さあい。」

「はあい。」と、駅長が声を張りあげた。

葉子は窓をしめて、赤らんだ頬に両手をあてた。

ラッセルを三台備えて雪を待つ、国境の山であった。トンネルの南北から、電力による雪崩報知線が通じた。除雪人夫延(のべ)人員五千名に加えて消防組青年団の延人員二千名出動の手配がもう整っていた。

そのような、やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分かると、島村は一層彼女に興味を強めた。

しかし、ここで「娘」と言うのは、島村にそう見えたからであって、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかった。二人のしぐさは夫婦じみていたけれども、男は明らかに病人だった。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すれば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

“这倒没有。”

“站长先生这就回家了？”

“我受了伤，每天都去看医生。”

“啊，这可太糟糕了。”

和服上罩着外套的站长，在大冷天里，仿佛想赶快结束闲谈似地转过身来说：

“好吧，路上请多保重。”

“站长先生，我弟弟还没出来吗？”叶子用目光在雪地上搜索，“请您多多照顾我弟弟，拜托啦。”

她的话声优美而又近乎悲戚。那嘹亮的声音久久地在雪夜里回荡。火车开动了，她还没把上身从窗口缩回来。一直等火车追上走在铁路边上的站长，她又喊道：

“站长先生，请您告诉我弟弟，叫他下次休假时回家一趟！”

“行啊！”站长大声答应。

叶子关上车窗，用双手捂住冻红了的脸颊。

这是县界的山，山下备有三辆扫雪车，供下雪天使用。隧道南北，架设了电力控制的雪崩报警线。部署了五千名扫雪工和二千名消防队的青年队员。

这个叶子姑娘的弟弟，从今冬起就在这个将要被大雪覆盖的铁路信号所工作。岛村知道这一情况以后，对她越发感兴趣了。

但是，这里说的“姑娘”，只是岛村这么认为罢了。她身边那个男人究竟是她的什么人，岛村自然不晓得。两人的举动很像夫妻，男的显然有病。陪伴病人，无形中就容易忽略男女间的界限，侍候得越殷勤，看起来就越像夫妻。一个女人像慈母般地照拂比自己岁数大

するほど、夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上の男をいたわる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思われよう。

島村は彼女一人だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。でもそれには、彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果、彼自らの感傷が多分に加わってのことかもしれない。

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えている、はっきり思い出そうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れていて、自分を遠くの女へ引く寄せるかのようだと、不思議に思いながら、鼻につけて匂いを嗅いでみたりしていたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはっきり浮き出たのだった。彼は驚いて声をあげそうになった。しかしそれは彼が心を遠くへやっていたからのことで、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が写ったのだった。外は夕闇がおりているし、汽車のなかは明りがついている。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチイムの温(ぬく)みでガラスがすっかり水蒸気に濡れているから、指で拭(ふ)くまでその鏡はなかったのだった。

娘の片眼だけは反(かえ)って異様に美しかったものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさという風なり旅愁顔を俄(にわか)づくりして、掌(てのひら)でガラスをこすった。

娘は胸をこころもち傾けて、前に横たわった男を一心に見下ろしていた。肩に力が入っているところから、少しいかつい眼も瞬(まばた)きさえしないほどの真剣さのしるしだと知れた。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

的男子，老远看去，免不了会被人看做是夫妻。

岛村是把她一个人单独来看的，凭她那种举止就推断她可能是个姑娘。也许是因为他用过分好奇的目光盯住这个姑娘，所以增添了自己不少的感伤。

已经是三个钟头以前的事了。岛村感到百无聊赖，发呆地凝望着不停活动的左手的食指。因为只有这个手指，才能使他清楚地感到就要去会见的那个女人。奇怪的是，越是急于想把她清楚地回忆起来，印象就越模糊。在这扑朔迷离的记忆中，也只有这手指所留下的几许感触，把他带到远方的女人身边。他想着想着，不由地把手指送到鼻子边闻了闻。当他无意识地用这个手指在窗玻璃上划道时，不知怎的，上面竟清晰地映出一只女人的眼睛。他大吃一惊，几乎喊出来。大概是他的心飞向了远方的缘故。他定神看时，什么也没有。映在玻璃窗上的，是对座那个女人的形象。外面昏暗下来，车厢里的灯亮了。这样，窗玻璃就成了一面镜子。然而，由于放了暖气，玻璃上蒙了一层水蒸气，在他用手指揩亮玻璃之前，那面镜子其实并不存在。

玻璃上只映出姑娘一只眼睛，她反而显得更加美了。岛村把脸贴近车窗，装出一副带着旅愁观赏黄昏景色的模样，用手掌揩了揩窗玻璃。

姑娘上身微倾，全神贯注地俯视着躺在面前的男人。她那小心翼翼的动作，一眨也不眨的严肃目光，都表现出她的真挚感情。男人头靠窗边躺着，把弯着的腿搁在姑娘身边。这是三等车厢。他们的座位不是在岛村的正对面，而是在斜对面，所以在窗玻璃上只映出侧身躺着的那个男人的半边脸。

娘は島村とちょうど斜めに向かい合っていることになるので、じかにだって見られるのだが、彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。

鏡の中の男の顔色は、ただもう娘の胸のあたりを見ているゆえに安らかだという風に落ちついていた。弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひっかけて口をぴったり覆い、それからまた上になった頬を包んで、一種の頬かむりのような工合だが、ゆるんで来たり、鼻にかぶさって来たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやっていた。見ている島村がいら立って来るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返していた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ気がついて直してやっていた。これらがまことに自然であった。このようにして距離というものを忘れながら、二人は果しなく遠くへ行くものの姿のように思われたほどだった。それゆえ島村は悲しみをみているというつらさはなくて、夢のからくりを眺めているような思いだった。不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう。

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が顫えたほどだった。

遥かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだったから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはいなかった。しかし色はもう失われてしまっていて、どこまで行っても平凡な野山の姿が尚更平凡に見え、なにものも際立って注意を惹きようがないゆえ

姑娘正好坐在斜对面，岛村本是可以直接看到她的，可是他们刚上车时，她那种迷人的美，使他感到吃惊，不由得垂下了目光。就在这一瞬间，岛村看见那个男人蜡黄的手紧紧攥住姑娘的手，也就不好意思再向对面望去了。

镜中的男人，只有望着姑娘胸脯的时候，脸上才显得安详而平静。瘦弱的身体，尽管很衰弱，却带着一种安乐的和谐气氛。男人把围巾枕在头下，绕过鼻子，严严实实地盖住了嘴巴，然后再往上包住脸颊。这像是一种保护脸部的方法。但围巾有时会松落下来，有时又会盖住鼻子。就在男人眼睛要动而未动的瞬间，姑娘就用温柔的动作，把围巾重新围好。两人天真地重复着同样的动作，使岛村看着都有些焦灼。另外，裹着男人双脚的外套下摆，不时松开耷拉下来。姑娘也马上发现了这一点，给他重新裹好。这一切都显得非常自然。那种姿态几乎使人认为他俩就这样忘记了所谓距离，走向了漫无边际的远方。正因为这样，岛村看见这种悲愁，没有觉得辛酸，就像是在梦中看见了幻影一样。大概这些都是在虚幻的镜中幻化出来的缘故。黄昏的景色在镜后移动着。也就是说，镜面映现的虚像与镜后的实物好像电影里的叠影一样在晃动。出场人物和背景没有任何联系。而且人物是一种透明的幻像，景物则是在夜霭中的朦胧暗流，两者消融在一起，描绘出一个超脱人世的象征的世界。特别是当山野里的灯火映照在姑娘的脸上时，那种无法形容的美，使岛村的心都几乎为之颤动。

在遥远的山巅上空，还淡淡地残留着晚霞的余晖。透过车窗玻璃看见的景物轮廓，退到远方，却没

に、反ってなにかぼうっと大きい感情の流れであった。無論それは娘の顔をそのなかに浮べでいたからである。姿が写る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。しかしほんとうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのように錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。

汽車のなかもさほど明るくはなし、ほんとうの鏡のように強くはなかった。反射がなかった。だから、島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れのなかに娘が浮かんでいるように思われて来た。

そういう時彼女の顔のなかにともし火がともったのだった。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかった。ともし火も映像を消しはしなかった。そうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだった。しかし彼女の顔を光り輝かせるようなことはしなかった。冷たく遠い光であった。小さい瞳のまわりをぼうっと明るくしながら、つまり娘の眼と火と重なった瞬間、彼女の眼は夕闇の波間の浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であった。

こんな風に見られていることを、葉子は気づくはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目に止まらなかっただろう。

島村が葉子を長い間盗見しながら彼女に悪いということを忘れていたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらえられていたからだったろう。

だから、彼女が駅長に呼びかけて、ここでもなにか真剣過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先に立ったのかもしれない。

その信号所を通るころはもう窓はただ闇であった。向うに風景の流れが消えると鏡の魅力も失われてしまった。葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども。その温かいしぐさにかかわらず、島村は彼女のうちになにか澄んだ。冷たさを新しく見つけて、鏡の曇って来るのを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com